

第 16 回平岡不整脈研究会の報告

平成 29 年度の平岡不整脈研究会は 12 月 9 日に盛会裏に無事終了しました。今回の参加者は 95 名、一般演題 14 題、特別セッション・特別講演 3 題の発表について活発な質疑が行われました。一般演題では応募の 15 演題から十分な発表と質問時間が取れないため 14 演題に絞らざるを得ませんでした。今回は症例発表・研究発表ともに発表や内容に優れたものが多くみられ、研究賞などを目指して熱演が続きました。

それぞれの賞の受賞者と発表演題は以下の通りです；

1) 最優秀研究賞（平岡賞）：

山添 正博先生（東京医科歯科大学・難治疾患研究所情報薬理学、
東京医科歯科大学・循環器内科）

「心房細動に付随する全身性炎症反応における cell-free DNA の寄与」

2) 症例賞（家坂賞）：

山口 純司先生（武蔵野赤十字病院・循環器科）

「ベラパミル感受性特発性心室頻拍術後に脚枝間・束枝間リエントリーを認めた一例」

3) 特別賞（桜田翔）：

山尾 一哉先生（土浦協同病院・循環器センター内科）

「発作性心房細動におけるクライオバルーン先端圧ガイド下肺静脈隔離術の有用性」

今回の症例報告・研究発表ともに内容や発表態度・質疑において優秀な演題が多く、審査委員も選考に苦慮したことが窺われました。一般演題について研究賞の設定以来連覇を続けていた横須賀共済病院の連覇が途絶えたが、それだけ各施設の発表に内容と質の向上が見られた証拠であり、次回からの発表がさらに競争が激化することが期待されます。

特別セッションでは、佐竹修太郎先生（葉山ハートセンター）がホットバルーンの開発の苦勞からその有用性と将来性についての熱演があり、新田順一先生（さいたま赤十字病院）からは、わが国で最も多い症例の経験からクライオアブレーションの利点と欠点の解説がなされ、聴衆にとって具体的で有用な講演となった。野上昭彦先生（筑波大学）の特別公演はいわゆる「ベラパミル感受性心室頻拍」について、頻拍回路の違いから4～5種類の亜型に分かれることをご自身が世界で初めて報告した例も含めてわかりやすく例示して参加者に多くの感銘を与えた。佐竹先生・野上先生ともにこの研究会の初めころから同じテーマに取り組んでおり、その熱意と長年の努力に敬意を表する会となった。

平岡 昌和